

# 仙台（市）における精神医学（精神病院）の濫觴（発祥）

—— 呉秀三「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」

（1907）を基に ——

近 藤 等, 浅 野 弘 毅

## はじめに

1997年に第1回精神医学史学会が開催されたり、その後相次いで精神医学史領域の著作が出版されるなど、近年、精神科領域ではその歴史を見直すことへの関心が高まっている。精神科領域でも生物学的研究の発展や新しい薬物療法の開発、evidenceに基づいた治療や操作的診断が主流を占めてきているが、精神障害の医療や研究を考える時、過去の差別や偏見の歴史を常に忘れずにいることが今後過ちを起ささない上で重要であるという自省の念の存在があり、それが精神医学史への注目の高まりの理由のひとつと考えられる。

現在の仙台市の精神医療を考える場合も、全国規模で見て明治時代に東北地方が精神医療面で出遅れた影響を残していないと言えないところがある。仙台の精神医学史は1906年の東北地方初めての精神病院である「東北脳病院（現・東北会病院）」の開設以降について語られることが多く、詳しい資料があるのは既に大正期に入った1916年の東北帝国大学医科大学（現・東北大学医学部）に精神病学講座が設置されて以降に限られる。それ以前の仙台の精神医学史について述べられているのは石井の著作<sup>1)</sup>のみと思われる。

さて最近、精神医学史への注目の高まりと関連してか東京帝国大学医学部精神病科第3代教授である呉秀三の著書が次々に復刻されている。その中には1907年の「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最

近ノ施設」<sup>2)</sup>が含まれている。これは同じく復刻された同著者の1918年の「精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」<sup>3)</sup>と並んで明治期の精神医療の実態を知る上での貴重な資料であるが、入手困難なものであった。今回の復刻により「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」を読んだところ、仙台市に関する記載は上述の東北脳病院について以外には仙台衛戍病院（陸軍病院）内の精神病患者収容設備、仙台医学専門学校（東北大学医学部の前身）の精神科の講義、慈善施設であったらしい東北慈恵院への精神障害者の収容の3点について見られる。この3点は今まで余り触れられた資料が見当たらない。今回、この3点についての記載を「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」から抽出するとともに、他の関連資料も引用して考察を加えて報告し、可能なら現在の仙台市の精神医療を考える上での一助としたい。

（なお「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」では旧漢字、旧仮名使いが用いられているが、現代文に直して引用した。また「精神病患者」など現在の精神医学用語では用いられない表現をそのまま引用する部分がある）

## 方 法

復刻版 呉秀三著「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」（創造出版）から仙台市に関する記述を抽出し（既によく知られている東北脳病院に関するものは除く）、他の資料も用いて考察を加える。

## 結 果

呉秀三著「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」における仙台市に関する記述を以下にまとめる。

### 1. 仙台衛戍病院

旧陸軍第二師団管轄の仙台衛戍病院には1878年6月に精神病者を収容する設備が建設されたとある。陸軍関係の病院では1874年の東京第一衛戍病院に始まり、仙台衛戍病院は全国で9番目、東北地方では1877年9月建設の第八師団管轄の青森衛戍病院に続き2番目であった。1907年当時、83衛戍病院中、24衛戍病院に精神病室が設置されているとある。

坪数はそれまで建設された衛戍病院の中では東京第一衛戍病院の65.0坪、熊本衛戍病院、名古屋衛戍病院の36.0坪に次ぐ広さで18.0坪となっている。

### 2. 仙台医学専門学校

仙台医学専門学校では、1891年9月に精神病科の講義が開設されている。当時、同校小児科教授であった内田守一が1899年5月に留学に出発するまで兼任していた。1900年5月から島柳二が内科部長として赴任し、精神病学を兼任。精神病科独立の準備として、1907年、島は精神病学及び神経病学研究の為、ドイツ・オーストリア国に留学。1909年9月30日に帰国するが、留学中に罹った病気の為に出勤できないまま、1910年6月24日に死亡。その為、同校で精神病科が独立することはなかった。この間、1907年から1909年までは同校内科小塚文治が兼任。1910年11月以降は同校加藤豊次郎内科教授（1882年生）が兼任。加藤は1908年東京帝国大学医科大学を卒業し、同大学で内科副手または助手として勤務していた。

同校の精神病学の講義は大半が学説講義で、臨床講義は期を定めず宮城病院内科（及び神経科）の外来患者中、適当な症例がいた時に行われた。

### 3. 東北慈恵院

1899年、仙台市元寺小路153番地に元陸軍一等

主計佐澤廣臣が経営者として東北慈恵院を設立。身寄りのない、教育を受けていない貧困な病者の施療をしたという。1905年9月以来、精神病者を収容。これは、1906年10月の東北脳病院（現・東北会病院）の設立に先んじている。当初は収容1名だったが、のち、次第に増加し、1907年当時は18、9人を収容していた。主治医1名を置き、患者2名につき1名の看護人を備えていたという。1907年3月に財団法人の認可を受けている。

## 考 察

呉秀三（1865～1932）は1901年に東京帝国大学医科大学精神病学講座第3代教授に就任し、ドイツを中心とする西欧の精神医学の導入を図って日本の精神医学の進歩に多大な寄与を残すとともに、1918年の「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」の中の1900年制定の「精神病者監護法」で合法化された私宅監置をはじめ日本の精神障害者の不適切な処遇に憤慨した「我が国十何万の精神病者はこの病を受けたる不幸のほか、この国に生まれたる不幸を重ねるものというべし」という一文が有名である。また1903年に精神病者慈善救済会を興した日本の精神保健活動の創始者でもある。

この呉の著した「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」は1907年「東京医学会二十五周年記念誌」第二輯に所載された、明治時代（1868～1912）の日本の精神医療の動向を知るのに貴重な資料である。上述のように仙台に関する記述も東北脳病院に関するものを含めると4点みられる。

一方、仙台（ないし宮城県）の精神医学史を最も詳しく述べているのは石井の著作<sup>1)</sup>で、江戸時代の宮城県における精神障害者の処遇や治療から始まり、定義温泉における精神障害者の治療（定義温泉について、呉は「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」では触れず、「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」の中で触れている）、共立社病院付属学舎（仙台医学専門学校の更に前身）における精神医学教育、東北脳病院、東北帝国大学医科大学精神病学講座設立当時の経緯、などについて詳述されている。東北慈恵院についての言

及があるので、当然、「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」は参照されたと思われるが、おそらく紙幅の都合か、仙台衛戍病院、仙台医学専門学校時代の精神医学教育については特に触れていない(最近の岡田の著作<sup>4)</sup>中、呉の著作の引用として仙台衛戍病院の精神病科病室、仙台医学専門学校時代の精神病学担当教授について触れている)。

明治時代は病院名や学校名の呼称の変更などが頻繁であり、呉は1907年当時の呼称を用いているため、いくつかの注釈が必要である。「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」の復刻版(創造出版)に併せて収録された、呉の弟子である榎田五郎著の「日本ニ於ケル精神病学ノ日乗」<sup>5)</sup>(1868～1922の年表)、金子準二編著「日本精神医学年表」<sup>6)</sup>などを参照して注釈を加える。

## 1. 仙台衛戍病院

仙台衛戍病院の前身は1871年仙台城跡に東北鎮台が設けられ、そこに置かれた鎮台病院で、1872年からは片平丁に場所を移し、1876年には仙台鎮台病院、1881年には仙台陸軍病院と名を改め、1888年、宮城県庁構内(勾当台)に移転し仙台衛戍病院に名を改めている<sup>7)</sup>(陸軍は同年に鎮台制から師団制に移行。また後述の宮城病院が元貞坂にあった当時の地図<sup>7)</sup>では隣接するように仙台衛戍病院の名前を確認できる)。すなわち、精神病者収容設備が作られたのは片平丁の仙台鎮台病院時代ということになる(榎田の年表でも1878年6月、仙台衛戍病院内に18坪で、となっている)。1888年の移転後も同規模の設備が続けて置かれていたのか不明である。いつまでその設備が存在したかは他の資料をあたっても不明であった。

また呉はどの衛戍病院についても「精神病者を収容する設備、(あるいは)精神病室」という表現をとっている。榎田は東京衛戍病院や仙台衛戍病院などについては精神病室、大阪衛戍病院、佐賀衛戍病院については精神病院と表現を変えているが、各々が単独の病棟なのか病室のみなのか不明である。呉は当時改築中の東京第一衛戍病院の精

神病室の略図を載せている。それを見ると独立した病棟に見える。岡田によれば1913年改築の東京第一衛戍病院の場合、65坪6床だったようで、おおくのところは1病院2,3床だったろうとしている<sup>4)</sup>。

抗精神病薬もない当時(電気ショック療法もまだない)、治療が行われたかも不明である。呉は「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」の中で東京府癲狂院において1883年当時使用されたいくつかの薬物(ヒオスチン、抱水クロラル、コデインなど)と1886年に始まった灌漑治療について記載しているが、衛戍病院で同様の治療が行われたかは不明である。

陸軍病院については小林による言及<sup>8)</sup>があり、前述のように24衛戍病院に精神病室が設置されたこと、1889年から陸軍一等軍医江口襄が陸軍医学校で精神病学の講義を担当したこと、1896年、陸軍は精神病を一等症に編入したこと、1906年から陸軍医学校では学生に東京大学精神病学教室で精神病学の勉強をさせることにしたこと、1909年、陸軍省医務局は精神病専攻生を東京大学精神病学教室に留学させることにしたこと、1911年、陸軍二等軍医正川島慶治が陸軍軍医学校で精神病学講義を担当したこと、などの記載がある(ここまでは呉の著作、榎田の年表にも記載がある)。この経緯から考えると少なくとも1906年頃までは衛戍病院の医師は精神医学の講義を受けておらず、もちろん精神科専門医はいなかったと思われる(陸軍軍医学校以外の出身者がいたかもしれない)。

小林によれば、その後、陸軍では精神医学的暗黒時代に突入し、1937年に至り、陸軍唯一の精神科専門医であった諏訪敬三郎軍医中佐らの努力により、陸軍病院に再び精神科が設置されることになり、1938年、精神科専門の国府台陸軍病院が誕生したという。

## 2. 仙台医学専門学校

東北大学医学部、並びにその附属病院の前身は複雑で、教育施設としては仙台藩医学校に始まり、宮城県立医学所、共立社病院附属学舎(共立学舎)、

共立義塾、県立「宮城病院」附属医学校、甲種「宮城医学校」などを経て1887年8月、第二高等中学校医学部、1894年に第二高等学校医学部、1901年に仙台医学専門学校、1912年東北帝国大学医学専門部、1915年東北帝国大学医科大学、1919年東北帝国大学医学部となっている<sup>9)</sup>。すなわち1891年、精神病学の講義が始まったのは第二高等中学校医学部時代ということになる（金子の年表ではそうになっている）。石井は共立社病院附属学舎時代は内科の教科書だったハルツホルン内科書の精神障害の記載を用いて内科学の中で講義されたのではないかと述べている<sup>1)</sup>。

附属病院は1884年9月からは元貞坂に開設された宮城病院で1911年、北四番丁に移転、1913年3月に県から東北帝国大学に移管され1915年医科大学附属病院となった<sup>9)</sup>。

第二高等中学校医学部、第二高等学校医学部、仙台医学専門学校時代の精神病学の講義に関する資料は乏しいが、1904年10月21日の仙台医学専門学校卒業証書には内科学、精神病学、生理学の担当として島柳二教授の名前が確かに見える<sup>10)</sup>。

1911年の宮城病院建築平面図（北四番丁に新築時）には本館2階に小児科、耳鼻咽喉科、皮膚梅毒科と並んで神科科外来が見られる（なお1階は内科、外科、婦人科、眼科外来<sup>10)</sup>）。しかし移転前の元貞坂当時の宮城病院の図面では神経科の名前は確認できない<sup>10)</sup>ので、その時代にも呉がいうように神経科の患者で臨床講義をすることがあったのかは不明である。また加藤豊次郎が仙台医学専門学校で精神病科の担当を始めた翌々年に同校は東北帝国大学医学専門部に移行しており、大半の仙台医学専門学校教授が東北帝国大学医学専門部教授には採用されなかった中、加藤は東北帝国大学医学部に至るまで内科学教授を続けている。東北帝国大学に移行後、下記の精神病学講座の正式発足までの間も加藤が精神病学講義を担当していたのか、また仙台医学専門学校は1915年に入学した学生が1918年に卒業するまでは東北帝国大学と並行して学生教育を行っており、この間の精神病学講義の担当がどうなっていたか、については今回調査が及ばなかった。

また呉の著書は1907年出版のはずだが復刻版ではこの項目に1911年までの記載があり、あとから補足されたのか資料の検討が必要である。

1916年3月2日、東京医科大学助手丸井清泰が東北帝国大学助手に任ぜられ、同年4月1日から11月末まで東京帝国大学医科大学精神病学教室で研究、同年12月30日にはアメリカのボルチモア市のジョーンズ・ホプキンス大学に留学。この年度から東北帝国大学医科大学に精神病学講座が設置されている。丸井不在の間、1917年4月から下田光造が東京帝国大学医科大学講師とともに東北帝国大学医科大学講師の嘱託となって東京から出張し、第3学年の第3学期に精神病学を講義した。1919年7月、丸井は帰国し、同年9月、初代教授に就任している<sup>9)</sup>。

### 3. 東北慈恵院

石井は「明治38年（筆者注；1905年）8月、仙台市元寺小路にあった東北慈恵院に精神障害者を収容することになった。これは身寄りのない生活困窮者や行路病者の収容所であったと思われ、はたして治療が行われたかどうか定かでない。」と記載している他、宮城県内に存在した同種の施設である私立石巻慈恵舎（1923～1937）について言及している<sup>1)</sup>。

それ以外、東北慈恵院に関する資料は乏しい。1915年発行の仙台市の地図の復刻版<sup>11)</sup>を見ると茂市ケ坂のすぐ西側の路地を広瀬通から北に向かって入ると、路地の東側に東北慈恵院の名前が確認される。また金子の年表では1906年5月（すなわち精神障害者収容開始の翌年）の項で、「河北新聞」に『仙台と精神病院』との題で「東北慈恵院の癲狂室に近接して幼稚園・小学校・高等女学校がある。宮城監獄の分監内の精神病室は小学校・商業学校に隣接し、狂声が授業中にきこえ、授業と市民の安眠とを妨害するその対策の要がある」と記事が出たと「神経学雑誌」（全巻五号）（筆者注；現・精神神経学雑誌5巻5号）にある、とある。早くも批判を感じさせるマスコミ記事が存在したようだ。また宮城監獄内の精神病室というものは他の資料では確認できない。榎田の年表で

は「1878年が5月、名古屋監獄内に精神病監を建設す。三室にて何れもツェルレ式なり。」とあり、呉は巢鴨監獄における精神病監について触れている。

小林は図表中で東北慈恵院に触れ、1921年に廃止としている<sup>8)</sup>。廃止の理由は不明であるが、1923年公布の精神病院法成立の動きと関係あるのだろうか。

呉の「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」の仙台に関する箇所はいずれも現在あまり関心を持たれていないことだが、例えば精神医学教育について見ると、1886年に東京帝国大学医学部に精神病学教室開設されているのに対し、東北帝国大学医学部に精神病学教室開設が開設されるのは1916年であったり、(近代的)精神病院開設は京都癲狂院開設の1875年、東京府癲狂院開設の1879年に対し、東北脳病院開設は1906年(東北慈恵院への精神病患者収容でも1905年)といずれも30年程度の出遅れが見られる。この出遅れが現在に何らかの影響を残していないとは言えない。

## ま と め

呉秀三著「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」から仙台市に関する記述を抽出し、他の資料も用いて考察を加えた。

① 仙台衛戍病院には1878年6月に精神病患者を収容する設備が建設された。坪数は18.0坪。仙台衛戍病院の前身は片平丁にあった仙台鎮台病院(1876～)で、1881年仙台陸軍病院と名を改め、1888年、勾当台に移転し仙台衛戍病院に名を改めているので、精神病患者収容設備が作られたのは片平丁の仙台鎮台病院時代ということになる。

② 仙台医学専門学校では、1891年9月に精神病学科の講義が開始された。小児科教授や内科教授兼任だった。1887年に第二高等中学校医学部、1894年に第二高等学校医学部、1901年に仙台医学

専門学校となっているので、精神病学の講義が始まったのは第二高等中学校医学部時代である。

③ 1899年、仙台市元寺小路に佐澤廣臣が経営者として東北慈恵院を設立。身寄りのない、教育を受けていない貧困な病者の施療をしたというのが、1905年9月以来、精神病患者を収容。1921年に廃止。

## 文 献

- 1) 石井 厚：日本精神医学風土記-第2部-第2回 宮城県. 臨床精神医学 **16**: 237-243, 1987
- 2) 呉 秀三：我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設. 我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設 附日本ニ於ケル精神病学ノ日乗, 創造出版, 東京, pp. 1-168, 2003 (初出は「東京医学会二十五周年記念誌」第二輯, 1907に所載)
- 3) 呉 秀三 他：精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察. 精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察, 創造出版, 東京, pp. 1-146, 2000 (初出は東京医事新誌 2087号, 1918)
- 4) 岡田靖雄：第III篇戦前 第3章 精神科病院と精神医学との発達. 日本精神科医療史 (岡田靖雄著), 医学書院, 東京, pp. 147-162, 2002
- 5) 樫田五郎：日本ニ於ケル精神病学ノ日乗. 我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設 附日本ニ於ケル精神病学ノ日乗, 創造出版, 東京, pp. 169-270, 2003
- 6) 金子準二：日本精神医学年表. 日本精神病院協会, 東京, 1973
- 7) 宮城県医師会：宮城県医師会史(医療篇). 宮城県医師会, 仙台, 1975
- 8) 小林靖彦：日本精神医学の歴史. 現代精神医学大系 第1巻 A 精神医学総論 I (懸田克躬 他編), 中山書店, 東京, pp. 125-161, 1979
- 9) 東北大学良陵同窓会事務局：東北大学良陵同窓会小史. 東北大学良陵同窓会会員名簿 平成十五年度(東北大学良陵同窓会事務局編), 東北大学良陵同窓会, 仙台, pp. 1-34, 2003
- 10) 東北大学医学部同窓会：良陵百年. 財団法人良陵医学振興会, 仙台, 1983
- 11) 今野印刷株式会社：仙台市全図. 今野印刷株式会社, 仙台, 1992 (原図は三澤書店, 1915)